

2021年横浜ナザレン教会・受難節第五主日(3/21)礼拝

「キリストを証して生きる」

ルカ福音書第21章7節から第21章19節

### 【聖書】

ルカによる福音書21:7そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」8 イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。9 戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」10 そして更に、言われた。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。11 そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。12 しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。13 それはあなたがたにとって証しをする機会となる。14 だから、前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。15 どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。16 あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。17 また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。18 しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。19 忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい。」

#### 1 この世の終わりの時

最近、折に触れて「イエス・キリストを信じるという事は、宗教ではなく、一つの生き方だ」と思われます。では、どういう生き方がイエス・キリストを信じるという事なのか？といえ、これは度々言ってきた事ですが、「縦軸と横軸で生きる」という生き方なのだと思います。縦軸は神との関係、横軸は人間や人間社会との関係。縦軸、イエス・キリストの父なる御神との関係がしっかりと私たちの中に打ち立てられている時、私たちは、自分自身や周りの人や社会との関係、水平の関係も安定して生きる事ができるのだと思います。ですが、この生き方はそうそう人間の努力で勝ち取れるものではないようです。

さて、先週の説教で、「イエス・キリストの十字架の後の三日目の甦りによって、終わりの時は、既に始まっている」と取次ぎました。私たちは、終わりの完成に向けて、終わりの時の始まりを生きています。そして、今日の聖書テキストには、この世の終わりが完成する前に起こる事について、主イエスが語っておられます。10節には「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。」11節には、「大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こる。」つまり、「終わり」が完成する前には、戦争、動乱、大地震、疫病が起こるというのです。

これら惨事が相次いで起こり人間社会が瓦解する様子は、つい最近まで、自分達にはあまり関係のない他人事、私たちがこの世の命を終えた後遠い未来に起こる事に過ぎない、と私たちは思っていたでしょう。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の中にある今、『『終わり』の時の終わりが、今、始まったのかもしれない』という思いさえ抱かされています。

そう、私たち、新型コロナウイルス感染拡大という今まで経験したことがない混乱の中にいます。そうしてつくづく、こういう混乱した時こそ、普段では見えない本当の姿が見えてくるのだと思われています。例えば、ワクチン一つにしても、結局は金持ちの先進国は自分たちさえよければいいと、買い占めましたし、日本でも真っ先に弱い立場の人々が解雇されているような、自己中心的な人間の有り様です。戦争や疫病や大地震のような甚だしい混乱の中では、安定していた時には見えにくかった人間と人間社会の本当の姿が顕になるようです。そして、今日の聖書テキストで主イエスが語られる終わりの時の終わりの直前、この世界が瓦解する時は、まさに混乱の中の混乱の時です、だから、終わりの時の完成の時には、これ以上ない位、私たち人間や人間社会の隠された本質が顕になると言えます。それはどんな姿でしょうか。

10節は戦争を示しています。民族と民族の間に対立が生まれ、国と国も敵対し合う、人間達の間が分断され、徹底的に憎み合い争い合う事。それが人間の本質だと聖書は語ります。そして、11節の大地震、飢饉、疫病は、自然現象。ここで言う大地震は、誰も人が住んでいない砂漠などで起こるものではなく、人が住んでいる地域で起こる大地震であり、11節は、自然災害によって多くの人々が犠牲となる事、人間が自然界から大きなダメージを受ける事が、終わりの時の成就の直前に起こる事だということです。つまり、11節の大地震、飢饉、疫病は、人間と自然界との断絶、敵対と言えます。ですから、終わりの時に明らかになるのは、人間と人間、人間と自然界の間にある深い断絶だと主イエスはおっしゃいます。どうしてこんな事になったのか？人と人、人と自然界の断絶はどうして起こったのでしょうか？

神と人との関係が壊れたからだ、聖書は語ります。人間は、神に似せて造られ、神の息が吹き入れられた特別の存在、神に特別に愛され喜ばれた存在。しかし、人間は、自分たちこそ神になりたいと思い、神を裏切りました。神との関係、縦軸が壊れた時、人との関係、横軸も壊れていきました。一人では生きていけはしないのに、互いに分かり合う事は難しい。人と人との間に、暗い影が入り込みます。私たちの生活の中でもよく判る事です。夫婦や子供、兄弟など家族や友人、恋人、会社の同僚やご近所との関係の中でお互いの気持ちが通じないという事はしょっちゅう起こっています。時には深刻な対立に進みます。そして、何より一番身近な人間は、自分自身。人は、自分自身との関係にも苦しむ者となりました。自分は生きている価値がないのではないか？自分を受け入れる事ができずに、苦しみ悶える事もありますし、高慢になって他の人を蔑ろにする場合もあります。人は神との関係を失った時から、自身とも隣人とも分断されて自己中心的に生きる存在となりました。それがエスカレートし、自分達の利益の為に他者を利用したり、お金や権力を巡ってお互いに争ったり。やがて民族の間や国家の間の対立が引き起こされ、戦争が起こります。

そして、私たちはこの世界は、自分たちの持ち物だと勘違いし、欲望を満たす為に、際限なく自然破壊を行い、神が造られた自然界の調和を破壊してしまいます。新型コロナウイルスの流行も自然破壊が原因だと言われてますし、古代から森林伐採など人間の営みが旱魃や洪水を引き起こし、大きな飢饉が起こりました。大地震で多くの被害が発生するのも、防災よりも経済を優先させるから。最近、四国のいがた原発の再稼働が認められましたが、これも人の命や自然を守る事よりは、経済活動を優先させたよい例です。つまり、そんな私たち人間の世界の本質、人間の神と断絶した姿、人間同士の間が断絶した姿、被造世界との間が断絶した姿が、『終わりの時の成就の前』に、顕わになると主イエスは仰います。

## 2 迫害がなぜ起こるのか？

そして、その前に迫害が起こると、主イエスは預言されます。「しかし、これらのことがすべて起こる前に、人々はあなたがたに手を下して迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために王や総督の前に引っ張って行く。」どうして、この世界の瓦解の前に教会やキリスト者への迫害が起こるのでしょうか？この主の言葉は、福音書がまとめられた当時、ユダヤ教やローマ帝国から迫害されていた教会の現実だ、という人々もいます。確かにそのようです。主イエスのこの預言が実現した様子が使徒言行録には描かれていますから。しかし、ですが、迫害は、現代世界でも起こっています。中国では、

中国共産党が認めていない教会の牧師や信徒たちは、財産没収や公民権停止を受け、牢獄に捕らえられる者もいます。王怡牧師もその一人です。彼は中国共産党、非公認の教会を創立し、多くの人々をイエスに導いていたのですが、中国共産党によって弾圧され、彼も2019年12月に「国家転覆罪」のかどで逮捕され、懲役9年の刑が課せられました。今も牢屋に収監されています。逮捕を覚悟した王怡牧師は、「私の声明—信仰的不服従」という声明文を自分が逮捕されてから48時間後に公表するように家族に託しました。実はこの声明文には、世界の崩壊の前に迫害が起こる理由が記されています。

王怡牧師は語ります。この世の悪しき支配者は、民が人間ではなく、神に立ち帰るようにと立てられたもの。だから、「中国共産党政権が神がお許しになられた一時的な統治者であることを、私は受け入れ、尊重する。」しかし、その一方で、「中国共産党が、教会を迫害する事については、極めて悪い犯罪行為として、公に厳しく非難する。それ故に大きな代価、つまり逮捕され収監され財産を没収されるような迫害にあっても構わない、それが主イエスの自分への命令だ」。つまり、彼は主イエスへの信仰の故に、中国共産党に服従する事を拒否しますが、中国共産党を否定し、その一党独裁の制度を変えようとはしません。彼はその理由として次のように言います。「牧師としての私の不服従の行為は、福音の使命の一部である。大いに宣教するようにとのキリストによる大宣教命令は、この世に対して大いに不服従することを私達に求めている。不服従の目的は、この世界を変革することではなく、もう一つの世界を証しすることである。」

王怡牧師は、どうして「大いに宣教するようにとのキリストの大宣教命令は、この世に対して不服従となる事を私たちに求めている」と言うのでしょうか。そこに、この世界の崩壊の前には迫害が起こる、と主イエスが語る理由があります。

それは、イエス・キリストの十字架と復活によって始まった終わりの時に生きているキリスト者達は、この世に生きている人々とは違う、新しい世界に生きているからです。

神との関係が壊れてしまった私達人間は、人と人との間、人と自然界の間が分断された世界、人間が「神」となった世界に生きるしかなくなりました。そこには、死を超える「神」はいないので、全ての被造物の存在は、「死」「滅び」で終わる世界です。死が命の最終回答である世界、人間が支配するようであって、実は「死」が支配する世界です。しかし、父なる御神は、私たちが肉体の命と共に滅び去る事が耐えられない、自分の腸が痛むように、人間の滅びをご自身の痛みとして悲しまれた。その一方で、神は完全



に正しいお方、間違ふ事のできない方。だから、ご自身に背を向け、自分たちを神として、人間同士で憎み合い、この被造世界も破壊するような人間の罪をそのまま見過ごすことはできないのです。滅ぼすしかないのです。だからこそ、必死になって、人々に呼びかけました。「あなた方が滅んでいい筈はない。私の元に帰ってきなさい。」この厚い旧約聖書のそこかしこに、全知全能の御神が人間を救おうと招く様子が記されています。しかし、この神の招きに応えた人はほんのわずかでした。

遂に、神はそれまでとは全く異なる新しい事を始められます。それが、ご自身の最も愛する独り子を完全なる人間として、この世界に宿らせた、この御子に、天の御神は、私たち人間の背きの罪を全部肩代わりさせ、ただ一人ご自身の御子イエスのみを滅ぼされました。だからこそ、私たち人間の背きの罪は赦されました。その証がイエスの三日目の復活です。イエス様が永遠の命に甦られた時、神と人との間の「縦軸」が新たに据えられたのです。この事を弟子たちがはっきりと理解できるようにと聖霊が降ってくださり、弟子たちの内に住んでくださいました。この時、全く新しい世界が、この滅び行く世界に始まりました。死ではなく命が、全知全能の永遠の御神が支配する世界が、死が支配する世界の只中に始まり、今も成長していています。私たちキリスト者が肉体を持ってキリスト者として生きるという事は、死が支配する世界の真ん中に、神が支配する全く新しい世界に生きる事なのです。

ですが、古い世界に生きている人々は、自分たちが世界を支配しているつもりです。最も巧みな支配者は、支配されている事を人々に感じさせない支配者だから。まさに死ほど巧みな支配者はいません。だから、古い世界に生きている人々は、神の支配がこの世の只中で成長する事を見過ぎしにできず、キリスト者達に、死の支配下に戻るように様々なやり方で圧力をかけてきます。だから、王怡牧師は「キリストによる大宣教命令は、この世に対して大いに不服従することを私達に求めている。」と言い、迫害が起こるのです。

### 3 静かに待つ

しかし、父なる神は、私たちが死が支配する世界を変えていく事を求めておられるわけではありません。父なる御神と主イエスが求めておられるのは、「キリストを証すること」です。いつ、証すればよいのでしょうか？古い世界に住む人々がキリスト者に対して、「死が支配する世界に戻れ」と圧力をかけてくる迫害の時こそ、「キリストを証しする機会だ」と主イエスは仰います。「迫害によって、王や総督の前に連行されるのは、あなたがたにとって証しをする機会となる。」

次の「前もって弁明の準備をするまいと、心に決めなさい。どんな反対

者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」(14,15節)。先ず「弁明の準備をすまいと決心せよ」と命じておられるのは面白い事です。「雄弁に証ができるように、ちゃんと準備しなさい」と言うのが常識的でしょう。しかし、主イエスは「決心せよ」とまでいう。まるで、「自分の力に頼るのはやめよ」と仰っているようです。では、どうすればいいかという、今日の礼拝の招詞が答えとなるように思われます、「お前たちは、立ち帰って静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」(イザヤ書 30:15)。「父なる神を信頼して、静かに待て」と言うのです。これは案外、私たちが、苦手な事です。自分の力で語りたくなるのです。しかし、これでは、まるでイエス・キリストは人間の力で弁護せねばならないようなお方のようなようです。勿論、イエス様は、人間の言葉で弁護せねばならない方ではありません。

天の御神を信頼しきって静かに待っていれば、必ず、「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵を、わたしがあなたがたに授けるからである。」と主イエスご自身が約束されています。私たちはこれを待つのです。このギリシャ語は、「私」という主語を強調する形のもので「他の誰でもない、このわたしがあなた方に授ける」と訳している聖書もあります。主イエスは危機にあるご自身の弟子たちに、私たちに、神のご支配を証する知恵と言葉を必ずお与え下さると力強く約束してくださいませ。

#### 4 私たちの目的

そして、先ほど紹介した王怡牧師の声明文は、まさにそのような主イエスから与えられた「どんな反対者でも、対抗も反論もできないような言葉と知恵」であろうと思います。彼の言葉をもう一度繰り返します。「死が支配するこの世界に対して不服従となる目的は、この世界を変革することではなく、もう一つの世界を証しすることである。」これこそ、まさに現代世界に響き渡るキリストの証です。主イエスが、逮捕の危機にある時に王怡牧師の耳に与えた死の支配下に生きるどんな者も対抗も反論もできない言葉。

何故なら、イエス・キリストは、この世界をご自身の力で変革しようとはされなかったからです。神の独り子です。やろうと思えば、一瞬で人々を洗脳しこの世界をご自身の支配する世界に変える事ができたでしょう。ですが、そうとはされなかった。父なる神に従い通し、十字架の苦難を忍び、父なる御神の愛と義を、私たち人間の背きの罪を貫く神の義と愛を証することに全てを注がれたお方だから。ですから、そのイエス・キリストの永遠の命に預かっている我々もまた、この世界を変革することではなく、もう一つの世界、神の支配のもとに生きる命を指し示していく、その為に私たちは、まだこの

地上に、死が支配する世界の只中にキリスト者として生かされているのだと思います。それは、死の支配から、神のご支配のもとへと一人でも救われる者が起こされる為にはほかなりません。

## 5 主イエスの約束、希望

しかし、古い世界の支配者、『死』の抵抗も苛烈です。私たちが最もして欲しくないことをしてきます。最も親しい人々の裏切りもその一つ。「あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺される者もいる。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。」あるとおり。第二次対戦中にもこれと同じ事が起こりました。戦時中、ホーリネス系の牧師の何人かは、天皇を神として崇めないと行って、特高に逮捕され、拷問を受けました。中には殺された牧師もいます。しかし、当時の教会は、逮捕された牧師たちを除名したそうです。人間はキリスト者であってもあてにはできない、そんな心凍えるような思いになります。それほど『死』の力は強い。しかし、いや、だからこそ、どんな時にも死に打ち勝った主イエスが私たちと共にいてくださいます。先ほど賛美した「慈しみ深いともなるイエス」には、「世の友我らを捨て去る時も」とあります。人はみな弱いのです。死の支配の圧迫に耐え切れず裏切ることもあるでしょう。しかし、主イエスは裏切りません。ご自身を証しようとする者たちのそばを離れることは決してない。私たちが主イエスに叫び声をあげた時、「この私がいる、私は決してあなたを見捨てはしない」と仰って大きな力を与えてくださいます。これは真実です。数多のクリスチャンがこの事を証言しています。主は恐怖と孤独に恐れる私たちに聖霊を注ぎ、忍耐する力を与えてくださいます。「あなたがたの髪の毛の一本も決してなくなるまい」と約束してくださるのとおりなのです。終わりの日の成就の時まで、主イエスをご自身の証人、キリスト者達を守り導いてくださいます。どんな試練にあおうとも、それは一時的な苦しみに過ぎないと、私たちの為に命を投げ出してくださった神の御子の約束であり、そこに希望があります。この希望に生きる命は、イエス・キリストの愛を、慰めを、励ましを経験する命。苦しみの中にあっても、幸いな歩みです。死に支配された命を、自分と他者、自然界と対立しつつ、「今だけ、金だけ、自分だけ」に生きる虚しさとは比較にならないほど充実しています。

そのような歩みを重ねつつ、神の国が完全に現れる終わりの日を待ち望みたい。その日こそ、イエス・キリストと顔と顔を合わせてお会いできる日、私たち人間同士の断絶、被造世界と断絶が完全に回復する日、喜びと命の光に満ちた朝、命を勝ち取る朝です。この朝に向かってひたすら進め、と主イ

エスは仰っています。イエス・キリストの証人として歩む幸いな命を備えて  
くださる神に心からの賛美と感謝を捧げずにはおられません。